

## 中世の鍋釜

### 鑄鉄製煮炊用具の名称

Medieval Japanese Pots and Kettles: Temporal and Spatial Variations in their Names

五十川伸矢

- ①はじめに
- ②中世の鑄鉄製煮炊具の変遷と地域性
- ③古辞書にあらわれた鍋釜
  - ④鍋釜の鑄物資料
  - ⑤描かれた鍋釜
  - ⑥おわりに

#### 【論文要旨】

古辞書にあらわれた鍋釜関係の語彙や鑄物資料に付された銘文、絵画資料などを検討して、鍋釜の名称の歴史的な変遷や地方的な呼称名の存在などを推論する。

古辞書をみると、12世紀中葉～13世紀前葉ごろには、「釜」も「鍋」も「かなへ」と呼ぶ場合があった。「かなへ」は煮炊具の総称でもあり、個別の器を呼ぶ時にも使われたと推定できる。鎌倉時代の後半になると、「釜」は「かま」（羽釜）、「鍋」は「なべ」（鍋A）と読む原則が確立し、「かなへ」に「鼎」という字が当てられはじめた。15世紀には、「釜」と「鍋」のほかに、「弦鍋」という名称が出現し、鍋Bが一般に広く普及したことを示す。また、「鐘子」や「煎盤」、「薬鐘」など、それまでの時代には明確でなかった器種の煮炊具も顕在化してきた。こうして成立した器種は、その後の伝統的な煮炊具の基本となったと考えられる。そのなかで、「かなへ」は、実用的な器種を指す名称ではなく、特殊な神器や古器などを呼ぶ名称になっていった。

鑄物資料の羽釜形のものは、三足の有無を問わず、中世以降銘文には「釜」という字が当てられている。一方、鍋形のものにも、「釜」と表記されているものがあるが、その古いものは、「釜」と「鍋」という字がともに「かなへ」と呼ばれた時代の所産である。その後のものに関して、鍋釜の器名と形態について絵入り百科事典や鑄物師の型録などの絵画資料を検討すると、近畿地方を中心とする鍋釜地域では、鍋Aは「鍋」と記されているが、それ以外の鍋地域では「釜」と記載されているところがあることが判明した。これは、中世の鍋Aや鍋Cが地域によっては「釜」と呼ばれていた可能性を示すものではないかと考える。

## ①……………はじめに

鑄鉄製の鑄物の代表は羽釜と鍋である。これらは、基本的に日用の煮沸用具として使用されており、破損すれば新たな製品の地金として再利用されるリサイクル品であるため、北陸地方には春に鍋釜を貸し付け、秋に損料を徴収して、破損品は回収するという「貸釜・貸鍋制度」と呼ばれる習俗があった。こうした性格をもっているため、鑄鉄製鍋釜は考古遺物としての数量が少ない。古代・中世の羽釜や鍋の遺品は、遺跡出土品と伝世品を合わせ、鑄造遺跡出土の全形のうかがえる鑄型も加えても、ようやく100点を越える程度であり、日常的に使用されたものでありながら、研究のむずかしい器物といえよう。

前稿〔五十川1992〕では、古代・中世の鑄鉄製の羽釜と鍋の資料を集成して、その形態の変遷や地域差を概括的に整理したが、製作にあたった鑄物師集団の系列や鑄物生産のあり方の歴史の変遷などに重きをおいて考察をすすめた。本稿では、前稿とは異なった視点から鍋釜の検討をおこなってみたい。すなわち、鍋釜の名称がじつは固定したものではなかったことを様々な角度から解説したいと思うのである。そこでまず、中世日本の煮炊用具の中心をなす鍋釜について、国語学の研究成果に学びつつ、鍋釜などの呼び名やあてられた漢字、文学作品や文献史料にあらわれた用例などを検討する。そして、鑄物資料に付された銘文などにみられる呼称や各地の鍋釜を描いた絵画資料を比較検討し、名称の歴史の変遷や地方的な呼称名の存在などを推論する。

釜や鍋は、台所道具の歴史として数多くの用具を列挙して解説する本に、必ずといってよいほど取り上げられているが、類書の記述をそのまま引き写したものが多く、その歴史的展開を新たにつつこんで検討したものは数少ない。そうしたなかにあって、朝岡康二氏による労作『鍋釜』（1993年）は、民俗学の立場から、鍋釜を日本、沖縄、朝鮮、中国という東アジア全体のなかで見通して分析した、はじめての総合研究であり、多くの示唆に富んでいる。筆者の考えたことがらなどは、氏の視野の広さやそれによる大きな成果に比較すれば、重箱の隅を楊枝ではじくるようなものにすぎないが、氏がふれなかった、鍋釜のもうすこし古い段階の歴史を、違った材料を使って自分なりに考えてみたいと思う。

なお、日本の鑄鉄鑄物鍋釜の遺物そのものに対しては、鐔状の羽のついたものを羽釜、それのないものを鍋、鍋のうち口縁部に屈曲のあるものを鍋A、吊り耳があり底部に小三足のつく鍋を鍋B、内耳のついた鍋を鍋Cと、それぞれ呼ぶこととする。また、羽釜や各種の鍋などを総称して鍋釜と呼ぶこともある。これに対して、鉤括弧のついた「釜」や「鍋」は文献史料に記載されたものや鑄物の銘文に記された文字を示すこととする。このほか、本稿の挿図に使用した鑄鉄鑄物の鍋釜資料の実測図の出典は稿末に記したが、そのうち伝世品の実測図は、特記のないかぎり筆者が実物にあたって作成したものである。

## ②……………中世の鑄鉄製煮炊具の変遷と地域性

中世の鑄鉄製羽釜・鍋の変遷と地域性について、最近明らかになった鑄造遺跡や鑄造関連の出土

遺物などをもとに、前稿の追加訂正をおこなっておきたい（図1）。

铸铁鑄物の羽釜や鍋は、12世紀のうちには定形化したものが各地で出現し、中世的展開が明確となる。特に畿内とその周辺部においては、河内国丹南郡を中心とする地域に本拠を置いた鑄物師たちが、その展開の中軸となったことが金石文資料から推定され、文献史料のうえでも灯呂供御人として鑄物師たちが活動したことが明らかにされている〔網野1984pp.431-538〕。しかし、各地にも鑄物師がおり、その製品には、それなりの地域差が形成されていったようである。

#### 羽 釜

羽釜は古代以降の伝統をもった器種であり、古い段階から三足付のもの（2）もあった。その器形は球形に近く丸味を帯びたもの（1）が古く、口縁が直立し、体部と底部との境目が明瞭になるものへと形態変化をしてゆく。畿内とその周辺は、明らかに羽釜が相当量生産供給された地域である。その外周部にあたる石川県小松市の林遺跡では、12世紀初頭ごろの羽釜と鍋Aの鑄型が出土し〔石川県埋文協会1993〕、愛知県名古屋市長蔵遺跡では、12世紀後葉～13世紀はじめごろの羽釜の鑄型が出土している<sup>(1)</sup>。ただし、石川県と愛知県ともに、中世にさかのぼる確実な铸铁鑄物の羽釜の出土例や伝世品がいまのところ確認されていない。また、神奈川県や山口県には中世前半の伝世品があり<sup>(2)</sup>、そのなかには確実にその地で製作されたもの（図2-11）もあるが、羽釜がそれらの地域で普遍的に製作されていた可能性は少ないように思われる。

#### 鍋

##### (1) 鍋 A

鍋Aの古いものは、口縁が体部から水平に出て、屈曲して上端はほぼ直立する形態をとることが多い。やがて口縁の屈曲はあまくなってゆき、体部から斜め上にまっすぐ伸びる形態が現れる。中世の前半に片口付のもの（4）もあるが例は少ない。現在のところ、資料数が少ないため断言できないが、細部において地域差がありそうである。鍋Aは、中世において西日本各地の最も主要な煮炊器種であったことは動かせない事実である。

##### (2) 鍋 B

鍋Bは鍋Aに遅れて、14世紀ごろには出現し、西日本の各地に広く分布するようである。14世紀半ばごろに作られた『慕婦繪詞』は、その精密な情景描写から、器物の考証によく用いられるが、鍋Bは、巻第10第2段の病臥する覚如の前面の囲炉裏に姿をみせ、単独で出土した鍋弦の年代にも符合する。朝倉氏の滅亡による放火で焼亡した福井市一乗谷朝倉氏館遺跡では、この鍋B（5）が相当量出土しており、16世紀における鍋Bの盛行を物語っている。また、中世の終りごろには、片口付の鍋B（6）も確実に出現している。西日本中心の分布を示していた鍋Bも、中世の終わりごろには、信濃などの東国や東北地方にも普及してゆき、近世のうちには鍋Aを凌駕して、主要な鍋の形態となり、やがて多岐に分化する〔香取1943、朝岡・石野1982pp.170-7〕。

##### (3) 鍋 C

中世の東国を代表する内耳の煮沸用具であり、死者にかぶせるという儀礼のために、比較的出土例が多い。岩手県平泉町の柳之御所跡からは、確実に12世紀の鍋Cが出土した（7）。丸い器形を示し内耳は対向してひとつずつつく。やがて体部は直立し口縁部は斜めに直線的に伸びる形態に変化し、内耳も1耳と2耳が対向する形式（8）がめだつようになる。その分布範囲は、東北一円、関東地方、長野県などである。その分布域の西辺を示す遺跡が2つある。岐阜県郡上郡八幡町穀見

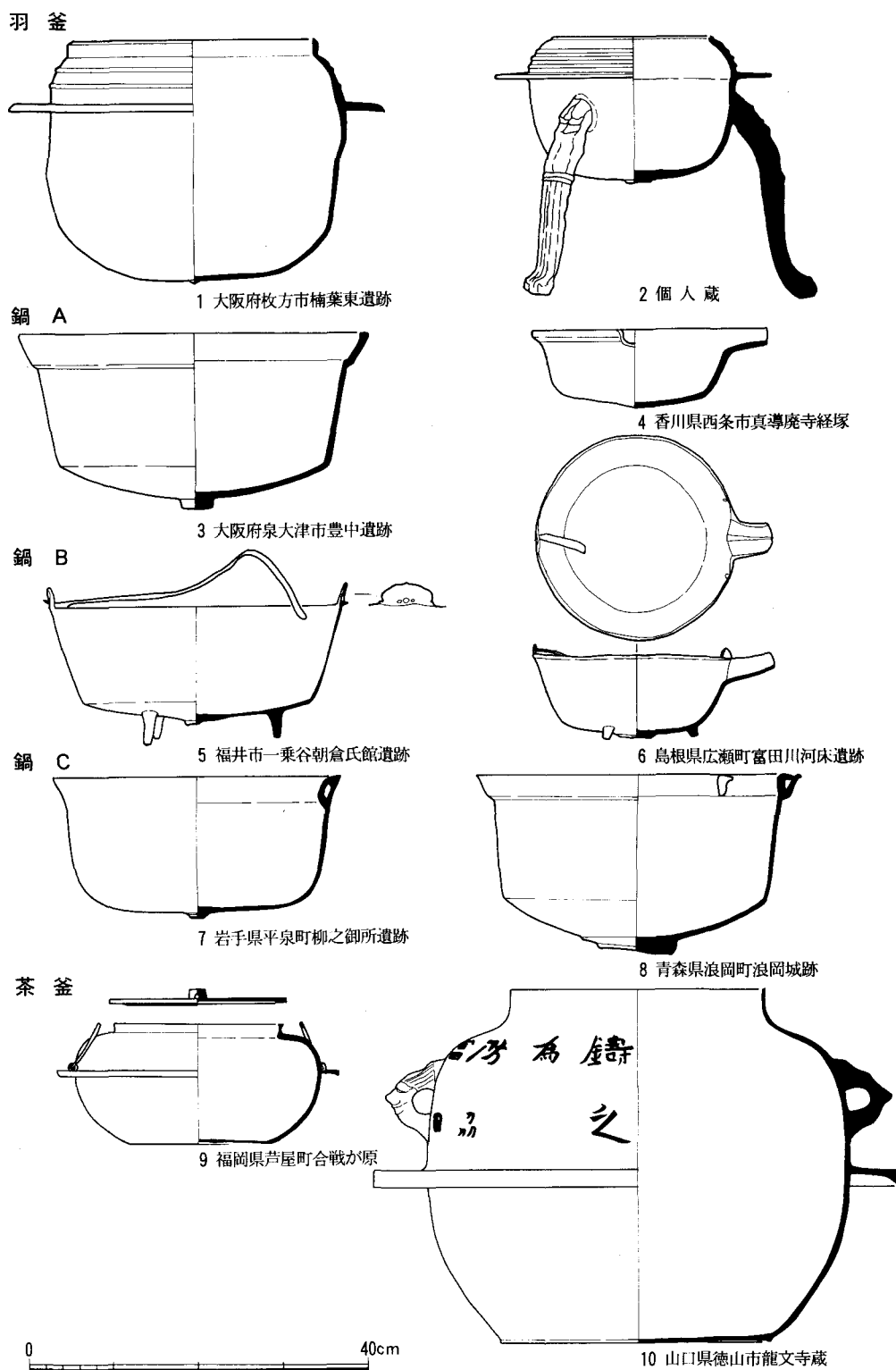


図1 鑄鉄制鍋釜の器種 1～10縮尺1/8

塚前遺跡では14世紀ごろの羽釜と鍋Cが相伴し、新潟県上越市子安遺跡では、室町時代前期の鍋Bと鍋Cが相伴して出土した。こうした遺跡を結ぶ線が、煮炊形態における東国と西国の境界であつたらしい。

#### 茶釜・鉄瓶

茶釜は、堺市甲斐町の堺環濠都市遺跡で出土しているほか、埼玉県坂戸市金井遺跡B区では鋳型が出土した〔埼玉県埋文事業団1994〕。また、最近では富山県射水郡大島町の北高木遺跡で、14世紀半ばごろの鍋Aの鋳型とともに茶釜の鋳型も出土し〔安念1995〕、長岡京跡右京第330次調査でも鐙の曲折する茶釜と蓋が出土している〔長岡京市教委1990pp.34-5〕。茶釜に関しては美術史的研究が先行しており、筆者はその成果を十分には消化していないが、出土品をみるかぎり、中世後半にいたるほど、資料が明確化してくる。

鉄瓶は、大阪府南河内郡美原町の日置荘遺跡6Aトレンチで、13世紀前半のもの〔大阪府教委1988〕、富山県福岡町開香酢大滝遺跡C地区で16世紀のもの〔富山県文振財団1994〕が、それぞれ出土している。鉄瓶は前述の『慕婦繪詞』の囲炉裏の情景にも、その姿をあらわしている。

#### 鍋釜地域と鍋地域

相当量の羽釜と鍋の生産と供給があった地域を、仮に鍋釜地域と呼ぶことにする。端的に言えば、鍋釜地域は畿内とその外周部の一部を含む地域であり、そこでは羽釜とともに、鍋Aと鍋Bが使用されている。これに対して、鍋を基本とする地域を鍋地域と呼ぶ。資料数が少ないために確言できないが、鍋地域は、近畿の外周部の、さらに外側の地域といえるように思う。また、その境界は、時代によっても変化があったのではないかと予想される。また、中世のうちに鍋地域と鍋釜地帯が融合解消していったとは思えない。近世のうちには、都市とその周辺は鍋釜地域に属することとなったと思われるが、後述のように、鍋を煮炊具の基本とする状態が継続した地域もあったようである。

## ④……………古辞書にあらわれた鍋釜

現在では「鼎」と書かれる「かなえ」という呼び名は、古い国語による表記であり、平安時代には銅あるいは鉄で作った煮炊容器の総称であったが、室町時代には「釜」が「かま」に、「鼎」が「かなえ」にあてられるようになったことを佐藤喜代治氏が指摘している〔佐藤1971〕。この佐藤氏の指摘に導かれつつ、古辞書にあらわれた「釜」あるいは「鍋」という語の周辺について、さらにつっこんで詳しく検討してみよう<sup>(3)</sup>。これらは、基本的に畿内とその周辺で使われた語彙とその用法であると考えてよい。

#### 平安時代中期

(9～10世紀)

##### 新撰字鏡

昌泰年間(898～901年)に成立した『新撰字鏡』には、「鍔 比良加奈戸又加奈戸」、「鍔 加奈戸」、「鑿」を、煎ったり飯を熟むものとして「奈戸又加志久」、「鍋 油器佐須奈戸」などの記載がある。

**和名類聚抄** 930年代に成立した『和名類聚抄』金品の項には、「鼎」は「阿之賀奈倍」と読み、三足両耳で五味を和(混)ぜる宝品、「釜」は「賀奈閉」あるいは「末路賀奈倍」、「鍔」は「散賀利」、「銚子」は「比良賀奈倍」、「鎗」は、「阿之奈倍」、「鍋」は「賀奈々閉」などと呼んでいる。瓦器の項にみえる「埴」は「奈閉」と読んで、「鍋」とは偏で区別している。

10世紀ごろには、金属製の煮炊用具には基本的に「かなへ」と「なべ」という呼び名があったことがわかり、脚の有無が「あしがなえ」と「まろがなえ」に対応するとよくいわれている。しかし、この時代に属する鋳物の遺品が少ないため、それ以上の検討は今後の課題である。

**平安時代後期～  
鎌倉時代初期**

(12世紀中葉～13世紀前葉)

**伊呂葉字類抄** 橘忠兼が天養・治承年間(1144～1180年)に撰した『伊呂葉字類抄』には、「鐵鍋 カナヘ」、「鍋 カナヘ」、「釜 カマ・カナヘ」とあり、「鼎」も「カナヘ」と呼んだらしい。

**類聚名義抄** 平安末期に成立した『類聚名義抄』には、「鐵鍋 カナヘ」、「鍋 ナヘ・カナナヘ・カナヘ」、「釜 カナヘ」、「鑊 カナヘ」、「鑊 カナヘ・サカリ」などがみえる。「鍋 ツチナヘ」もあり、これも偏で材質を区別しようとしている。

**字鏡集** 鎌倉時代初期の『字鏡集』には「釜 カナヘ・カマ・マロカナヘ」、「鍋 カナヘ・ナヘ・カナナヘ」、「鑊 カナヘ・カマノフタ・ヒラナヘ」、「鑊 サカリ・イシツキ・カナヘ・ヒラカ・カサリ」などがみえる。

以上のように、12世紀中葉～13世紀前葉ごろには、その前代の呼称を受け継ぎつつも、「釜」は「かま」、「鍋」は「なべ」という新しい呼び方が芽をだしているが、「釜」も「鍋」も「かなへ」と呼ぶ場合があった。つまり、「かなへ」は煮炊具の総称でもあり、個別の器を呼ぶ時にも使われたと推定できる。また、金属製と土製を偏で区別しきれなかったのか、金偏がついていても金属とはかざらないため、「鉄鍋」という言い方が存在したのであろう。この中世はじめの時代には、「釜」と「鍋」の両字の厳密な区別が定着していなかったといつてよい。

**鎌倉時代後期**

(13世紀後半～14世紀前葉)

**名語記** 鎌倉時代後期に成立した『名語記』には、「家ノヘツイニ塗ルカマ如何 答 カマハ釜也 カナムナの反 金空也 鐵ニテ鑄タルカ内ノホラニテウツケタル心也」(巻第四)、「釜トイヘル物ノハ如何」(巻第二)、「世間ノ具足のカナヘのナヘ如何 答 ナヘハ鍋也」(巻第四)、「問 カナヘにイレテ物ヲニル如何 答 煎也」(巻第三)などの記載がある。古辞書にあらわれる鍋釜のうちで、実態にせまる記述である。

**聚分韻略** 14世紀初頭ごろに虎関師錬が著した『聚分韻略』には、「釜 釜— アシナヘ」、「鍋 釜— ナヘ」、「釜 —釜 カマ」、「釜 —鍋 カマ」、「鼎 宝— カナエ」、「鑊 鼎— ナヘ」などの記載がある。

鎌倉時代の後半になると、「釜」は「かま」、「鍋」は「なべ」と読む原則がかなり確立してきた感がある。『名語記』によれば「かなへ」は鍋釜の総称でもあったと思われるが、『聚分韻略』では「鼎」という字があてられ、定着してゆく。『名語記』の記載によって「釜」は確実に羽釜とみられるから、「鍋」は基本的に鍋Aとみてよいだろう。前代との違いがいよいよ明瞭になってきており、羽釜や鍋の普及が進んだことを物語っているのではあるまいか。

**室町時代～  
慶長年間**

(15世紀中葉～17世紀初頭)

**下学集** 文安元年(1444)成立の『下学集』では、第十三器財門に「鍋、釜、鼎、煎盤、弦鍋、飯鍋、(中略)罐子、葉罐」などが並んでおり、鋳鉄製あるいは銅製の煮炊に関する容器が列挙されているものとみてよい。

**撮壤集** 享徳3年(1454)に成立した『撮壤集』の家具部には、「<sup>クワンス</sup>罐子、<sup>バンドウ</sup>飯銅」、ややあって「<sup>カナヘ</sup>鼎、<sup>ナベ</sup>釜、<sup>カマ</sup>鍋、<sup>センバン</sup>鑪」などがみえる。

**文明本節用集** 文明6年(1474)ごろに禅僧によって編纂されたとみられる『文明本節用集』には、「<sup>ハガマ</sup>齒釜」、<sup>カマ</sup>釜 大鍋類也、「<sup>カナエ</sup>鑪」、<sup>カナエ</sup>鼎、「<sup>ツルナベ</sup>弦鍋 又云弦掛」、<sup>ナベ</sup>鍋 又云鍋児、「<sup>クワンス</sup>罐子」、<sup>ヤクワン</sup>薬鑪、「<sup>センバン</sup>煎盤」などがみえる。これ以降引き続き刊行された各種の節用集においても、ほぼ同様の記載がみられ、慶長15年(1610)刊行の『易林本節用集』には「鼎」と「鑪」を「カナヘ」と読ませている。

**温故知新書** 文明16年(1484)に成立した『温故知新書』には、「<sup>カマ</sup>釜 一鍋」、<sup>カナヘ</sup>鑪、「<sup>センバン</sup>煎盤」、<sup>ナベ</sup>鍋 がみえる。このほか、本書には「<sup>フソウ</sup>釜飯」や「<sup>ツチナヘ</sup>埵」などもみえる。

**和玉篇** 長享3年(1489)には成立していたとみられる『和玉篇』には金部第四十に、「<sup>ナベ</sup>鍋」、<sup>カマ</sup>釜、「<sup>カナヘ</sup>鑪」がみえる。

**運歩色葉集** 天文17年(1548)に成立の『運歩色葉集』では、「<sup>カマ</sup>釜」、<sup>カナヘ</sup>鼎、「<sup>ツルナベ</sup>弦鍋」、<sup>ナベ</sup>鍋、「<sup>クワンス</sup>罐子」、<sup>センバン</sup>煎盤 などがみられる。

**日葡辞書** 日本耶蘇会が慶長8年(1603)に印行した『日葡辞書』には、「Cama カマ(釜) 鉄製の釜または鉄鍋」、「Fagama ハガマ(羽釜) 鉄の鋳物の釜でまわりに鉄製の帯状のものがついているもの」、「Nabe ナベ(鍋) 深鍋または浅鍋」、「Quansu クワンス(罐子) 茶の湯用の鉄の釜または釜」、「Tçurunabe ツルナベ(弦鍋) 鉄鍋あるいは浅鍋の一種、その鍋の耳についているある鉄具をつかんでもちあげるもの」、「Xenban センバン(煎盤) 銅製の浅鍋または鍋」、「Yaquan ヤクワン(薬鑪) 葉を煎じるためのある種の深鍋。これが本来の意味であるけれども、いまでは湯をわかすある種の深鍋の意味で通用している」などの記載がある。採録語彙には近畿以西のものが含まれているとみられる。『名語記』と並ぶ、ものの実態を如実に語ってくれるありがたい辞書である。それは作成者と作成目的のゆえにほかならない。

以上のように、15世紀には、「釜」と「鍋」のほかに、「弦鍋」という名称が出現したことに注目したい。「釜」は羽釜、「弦鍋」は鍋Bに該当するものとみてよい。宝徳3年(1451)10月7日付の「彼方壽阿彌華藏庵器具注文」(東寺百合文書を244)には、「くりのへやの分」として多くの器財が列挙されているが、そのなかに「かま 一、なへ 一、きりはん 三、つるなへ 一」がみえる(大日本古文書家わけ第十 東寺文書之六)。この「なへ」は「つるなへ」と併記されているところから鍋Aの可能性が高い。しかし、『七十一番職人歌合<sup>(4)</sup>』(室町時代)の「鍋うり」の図をみると、鍋Bが確実に描かれているため、「鍋」を鍋Aだけに限定せず、鍋Aと鍋Bが含まれる場合もあったとみるほうがよさそうである。

また、「かなへ」という呼び名には、「鼎」や「鑪」という字があてられることが多く、『下学集』第十三器財門や『撮壤集』家具部に、「鼎」が「釜」や「鍋」と併記されていることから、羽釜や鍋とは別種のものを、それと呼称した可能性もある。その器形は、これらの古辞書だけでは明確ではない。中世の鋳物製品で、銘文に「鼎」と記載しているものはなかなかみいだせない。畿内周辺では三足のついた羽釜があり、それを指したのではないかと推定されるが、後述のように三足付羽釜は「釜」と銘記されたものばかりである。また、『日葡辞書』には、「カナエ」と読むものが採録されていないのも気になる。そのころには、あまり実用的でないもの、ふだんみかけないもの

が「鼎」であったのかもしれないのである。

また、「罐（罐）子」は、後述の江戸時代の方言辞典『物類称呼』から茶釜の古名とみられるが、鈴木友也氏によれば、天文23年（1554）に作られた『茶具備討集』に芦屋釜や天明釜、京釜、伊予釜などの記載がはじめてあらわれ、それ以降各種の茶会記に「釜」という記載が増加するという〔鈴木1973〕。このほか、「薬罐」は、『下学集』や『文明本節用集』以降、豊富にあらわれる。「薬罐」については、『鎌倉殿中以下年中行事』（享徳3年（1454））の正月5日の条に「薬罐ナド参時ハ、右ノ手ニテハツル（弦）ヲ取、左ノ手ニテハ口ノモトヲ取テ、口ヲバ公方様御坐有方ヘ向申サズシテ進上致スベシ」とあり、弦と片口をもった器形であることがわかる。また、『日葡辞書』の時代には、着実に現代の「ヤカン」に近づいてきていることも判明する。「鉄瓶」という言葉は江戸時代になってから出現するらしいが、あるいは鉄瓶の形態のものを「薬罐」としていた可能性もある。このほか「煎盤」は、伊京集・明応五年本・饅頭屋本・易林本などの『節用集』に「銅物」の注記がある。青銅鑄物の器ではないかと思われるが、実態は不明である。

さて、これらをまとめると、出土資料からみて鍋Bは14世紀のうちには出現するが、15世紀には一般に広く普及したことを、上記の古辞書が物語っているものとみられる。そのみならず、「罐子」や「煎盤」、「薬罐」など、それまでの時代には明確でなかった器種の煮炊具がその姿をあらわしてきたと思われる。こうして成立した器種は、その後の煮炊具の基本となったと考えてよいだろう。すなわち、煮炊具の世界においても、南北朝時代を節目にした中世の半ば以降に形成された様式が、近世から近代そして第2次世界大戦の前にいたる日本の伝統的生活様式の出発点であったと考えられ、網野善彦氏のいわれる民族史的展開〔網野1980pp.167-182・1984pp.571-586〕にも重なりあうものではないかと考える。

#### 江戸時代

（17世紀中葉～19世紀中葉）

江戸時代には絵入り百科事典があらわれた。そのうち二書を取りあげて検討する。

**訓蒙図彙** 京都の儒学者中村惕斎が寛文6年（1666）に著した『訓蒙図彙』の巻第九器用三には、「鼎 あしかなへ」、「釜 まろがなえ」、「鍋 かななべ」、「鍺 さかり」、「鑪 さしなべ・さすなべ」という項目があり、鼎には宝器の絵が、釜には羽釜、鍋には鍋Aと鍋B、鍺には茶釜、鑪には把手付鍋Bが、それぞれ描かれている。

**和漢三才図会** 大坂の医師寺島良安が正徳3年（1713）に印行した『和漢三才図会』の巻三十一庖厨具には、「鼎 あしかなへ」、「釜 まろがなえ・かま」、「罐子 くわんす」、「鍺 つりかま」、「甌 こしきかま」、「鍋 なべ」、「鑪 あしなべ」などの項目があり、鼎には宝器、釜や甌には羽釜、罐子や鍺には茶釜、鍋には鍋B、鑪には鉄瓶の図が、それぞれ付してある。

『防長風土記注進案』（天保13年（1842））第二の三隅村之二には、長門国大津郡三隅村の大権現宮で、正徳元年（1288）銘の鑄鉄製羽釜が寛文5年（1665）に掘り出された記事がある。この羽釜は現存し、中世前半のものであることはまちがいない〔五十川1992p.14, 16〕。『防長風土記注進案』の記事には、この羽釜に、「鍺」あるいは「鼎」という字をあてている。

このように、「鍺」や「鼎」は、江戸時代には形態を重視した表現とみるよりも、確実に特殊な宝器や古器などの器を呼ぶ名称になっていったと考える。前述のように中世の半ばごろに「鼎」が



どんな器種を示したのかはまだ明確でないが、『日葡辞書』に「カナエ」があらわれないことからみて、「かなえ」が宝器や古器と認識されるようになったのは、さらに中世にさかのぼる可能性が高い。今後さらに検討をすすめたい。

## ①……………鍋釜の鋳物資料

前節に示した鍋釜の名称の歴史的変遷を、さらに鋳物関係資料などから検討してみたい。まず、器壁に銘文があって器名の知られる鍋釜の鋳物資料や、文献史料などから、その名称の推定されるものなどをとりあげて検討する。それらの鋳物資料のうち、おもなものを図2～4に示した。

### 羽釜形の鋳物資料

羽釜形の器形をした中世前半の鋳物製品で、その銘文に器名のあるものをあげると、和歌山県東牟婁郡本宮町本宮大社羽釜（建久9年（1198））、神奈川県足柄下郡箱根町の箱根神社の2口の羽釜（文永5年（1268）・弘安6年（1283））などがある（11～13）。それぞれ「釜」、「湯釜」、「浴堂釜」の陽鑄銘文がある。後二者は、やや大型であり、あるいは『是害坊絵』の賀茂河原の湯治シーンに見られる羽釜のような使われ方をした可能性もある。また、数多くの『六道絵』における地獄の釜の形態をみると、大型の羽釜で三足のつくものが多い。これは南部興福寺の大湯屋の釜の形態と酷似する。このように羽釜は基本的に「釜」と表記されるものであったとみられる。

中世の半ばから後半の鋳物資料では、前稿〔五十川1992pp.14-26〕で詳述したように、大和・河内・紀伊北部などで湯立て神事に使用された釜は、すべて羽釜形のものである。これらには、陽鑄の銘文に「御湯釜」と記されたものが多く、この時期の近畿を中心とする地域の羽釜形の容器が、基本的に「釜」と記されていたことはまちがいない。これらの湯釜のなかには、和歌山県九度山町丹生官省符神社釜（15）のように、長大な三足をもつものもしばしばみられるが、三足をもたないものもある。

上にあげた地方のほかでは、たとえば山城や伊賀では、中世の末ごろの羽釜資料があり、これも「釜」と記されている。また、近世の資料を検討すると、大和・河内・紀伊はもちろん、山城・和泉・摂津・近江の地域にも湯立て釜の資料が相当量遺存している。それらの調査を現在進めているところであるが、これらの資料のうち、器名に関する銘文のあるものには、まちががなく「釜」と記されている。さらに、その東の周辺にあたる東海地方の一部でも、愛知県高浜市八幡社の湯立てに使う釜には、「御湯釜」と銘文があり、同県安城市の不乗森神社の湯立て釜も羽釜形である。また、鳴釜神事で名高い岡山市吉備津神社の釜で、現在保存されており、嘉永5年（1852）製作と伝えるものは、口径53cmの長胴の羽釜である。

なお、1例のみ特殊な資料がある。長崎市鍛冶屋町の崇福寺蔵羽釜には、「施粥巨鍋」の銘があり、これは「なべ」と呼ばれたらしい。口径約90cmと大型で、飢饉の時に住持千保禅師が書籍什物売って施粥をするため、天保2年（1682）に地元の鋳物師に作らせたという。しかし、この1例を除いて、羽釜形のもの、三足の有無を問わず、まずまちががなく、中世以降銘文には「釜」という字があてられている。やはり羽釜は時代と地域をとわず、基本的に「釜」という字があてられたものとみられる。

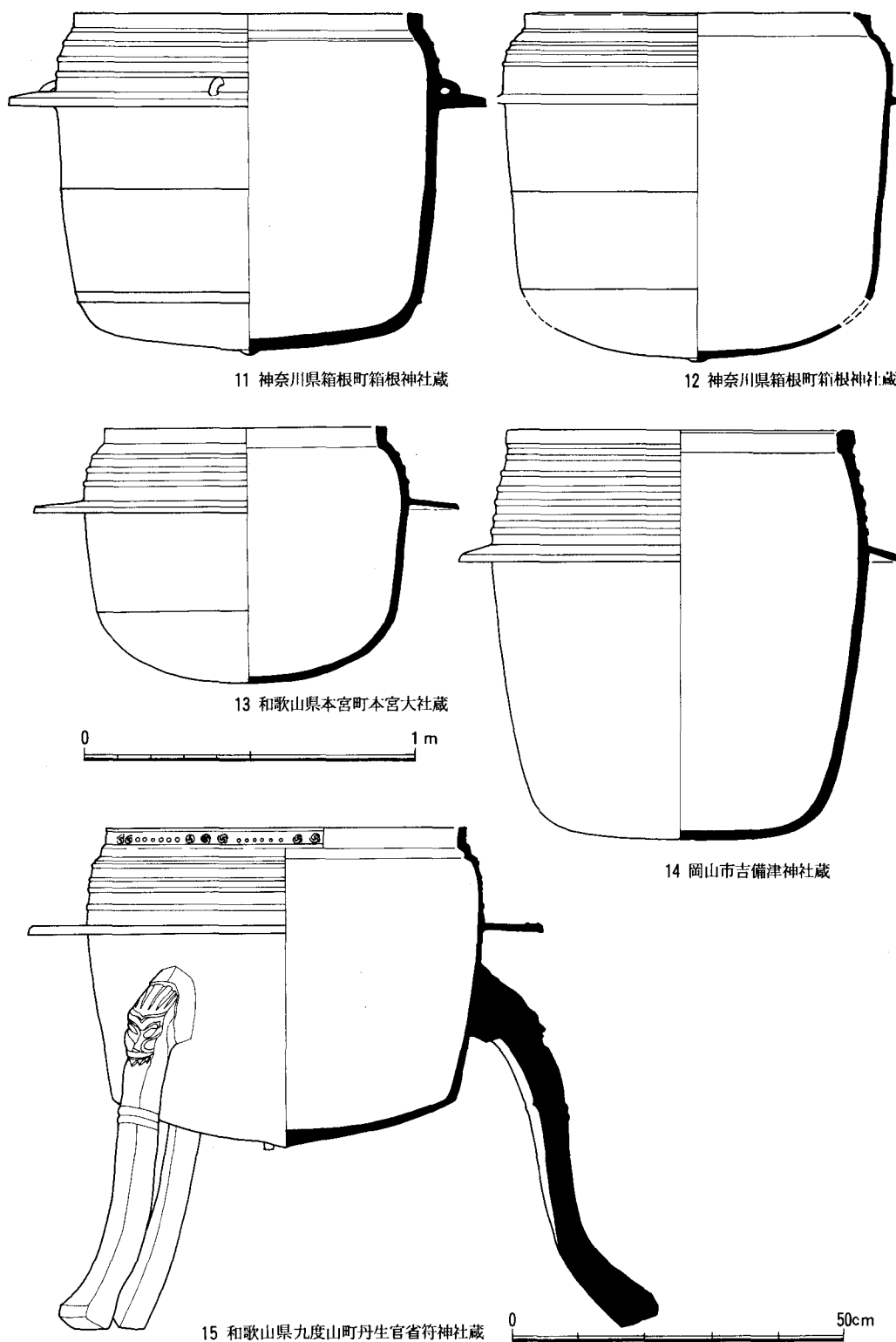


図2 羽釜形の鑄物資料 11～13縮尺1/20, 14・15縮尺1/10

### 鍋形の「釜」

「釜」と呼ばれるものには、じつは鍋形のものがある。山口県防府市の周防阿弥陀寺蔵鍋（16）、岡山県総社市の備中新山寺跡鍋（17）、滋賀県大津市の園城寺蔵鍋は、やや大型の半球状の器形の上に屈曲した口縁があり、型式学的にみて鍋Aの古い形態と考えられる。これらの大型の鍋Aは、俊乗坊重源の作事にかかわるものにまちがいはなく、12世紀末ごろに製作されたもので、文献との対応から「湯釜」と呼ばれたことが確実である。また、草部是助を中心とする東大寺大仏再建に深くかかわった鋳物師の作品であることが推定される〔小林1971、江谷1976〕。製作にあたって縦方向に鋳型を分割するという特異な技術が駆使されており、東大寺の大仏の再建には、陳和卿以下、宋人の鋳物師が参加しているため、宋の鋳造技術が導入されているものと筆者は考えた〔五十川1990〕。その後、こうした形態の「湯釜」の遺品がないため、12世紀末の特殊な資料である可能性が高いが、このころには、「鍋」と「釜」の文字はともに「かなへ」と読まれることがあったことを前節で示した。それにしたがえば、あるいは「鍋」と「釜」という語が、あまり厳密に器形に結びつけられなかったために、鍋形のものも「釜」と記されることがあったのではなかろうか。

さて、中世の半ばごろの鍋資料で銘文をもつものは、現在のところなかなかみいだせないが、中世の終りごろ以降のものとして、まず千葉県佐原市の香取神社蔵資料（18）は、明らかに鍋Cの形態をとるものであり、「御供釜」と記されている。同じ形態のもので「御湯釜」という銘文をもつものに、天正15年（1587）銘の長野県上田市の生島足島神社蔵品（19）、慶長7年（1602）銘の同県小県郡真田町の山家神社蔵品（20）などがある。このほか関東地方では、栃木県日光市の中禅寺に、貞和2年（1346）銘の「釜」と応永23年（1416）銘の「御穀釜」があったことが『集古十種』（18世紀末成立）にみえ、同様の形態のものであった可能性が高い。

次に、近世以降の湯立て釜と総称される資料について検討する。前述の信濃生島足島神社には、近世の作品があるが、短い口縁をもち、体部中央で大きく屈曲するもの（21）や口縁が屈曲するもの（22）などがある。いずれも小さい三足が付加されており、鍋Bの影響を受けているが、鍋Bの本来的な形態ではありえず、鍋Cあるいは鍋Aの形態から導き出される形態をとるものとする。このほか、長野県諏訪市の諏訪上社には鍋Cの形態をひく文政6年（1823）銘の湯立て釜が遺存している。信濃を中心とする中部高地一帯では、古代に特殊な羽釜を生産しているが、中世には内耳の鍋Cをもっぱら使用している。そして、中世に確実にさかのぼる鍋Aの出土例がなく、鍋Cを模倣した土製の鍋が出土する。中世の信濃は鍋地域とみられる。

次に、北陸に目を転じると、能登の羽咋・鹿島・鳳至・珠洲の4郡や越中の射水郡の各地の近世の湯立て釜は、能登中居や越中高岡の鋳物師たちによって製作されたものである（23～26）。その中には「湯立釜」と銘記されたものが非常に多い。一部に小三足をもち、鍋Bの影響を受けたかと思われるものもあるが、基本的にその形態は、鍋Aの流れをくむものと考えてよい。南へ下がって越前の福井県今立郡今立町大滝神社にも、鍋形の湯立て釜が2口あり（27・28）、しかも羽釜形のもの2口が並存する〔今立町誌編さん委1981pp.108-10〕。北陸では、前述の小松市林遺跡にみられたように中世の初期に羽釜と鍋Aを生産した鋳造遺跡が発見されている。これに続く鋳造遺跡として富山県大島町北高木遺跡があるが、鍋Aと茶釜が確認されるだけで、羽釜の姿が明確でない。中世の北陸では鋳鉄鋳物を補完する土製の煮炊具が積極的には生産されておらず、基本的煮炊具は、お

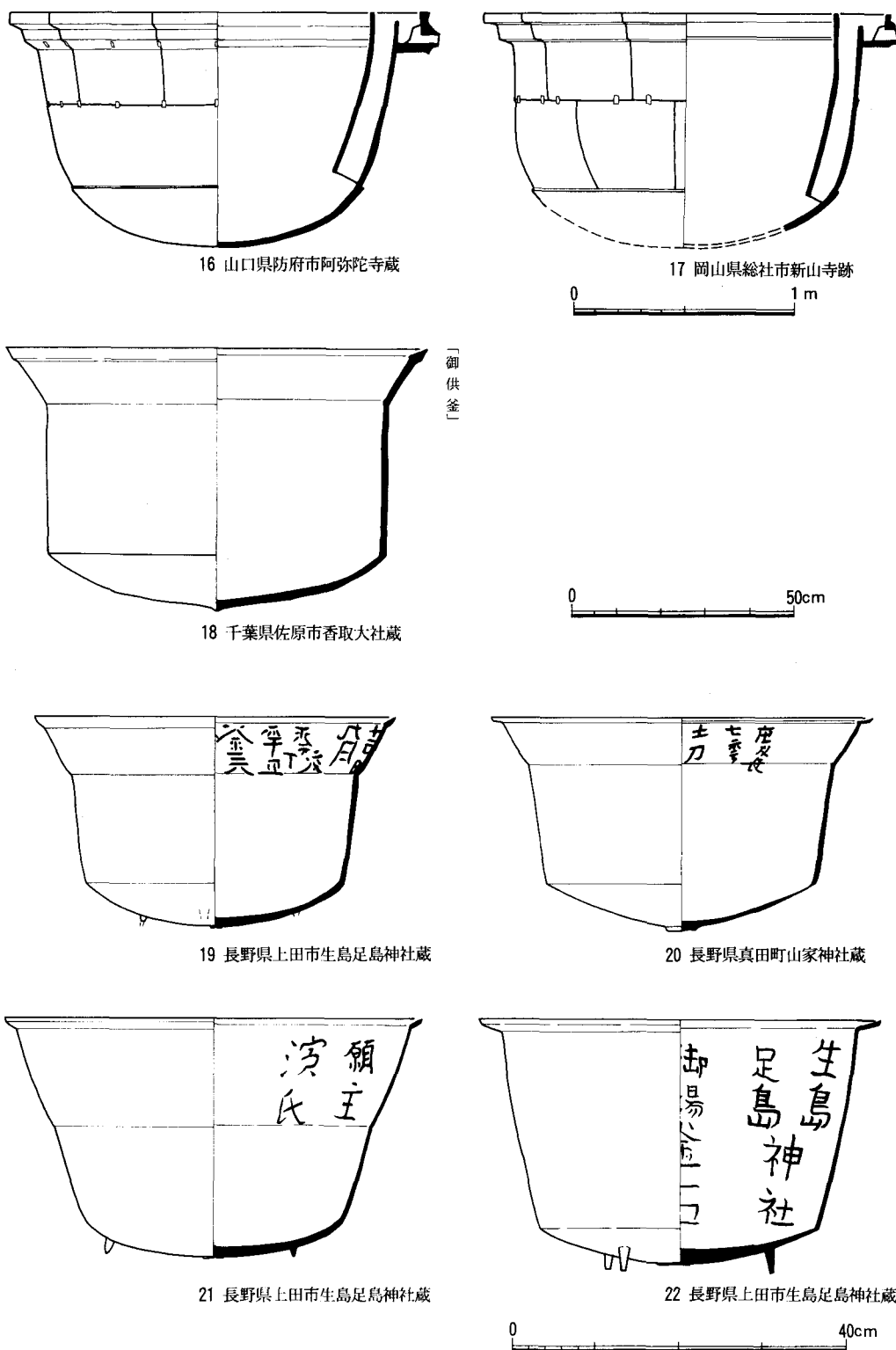
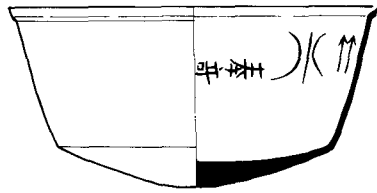
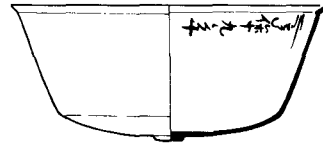


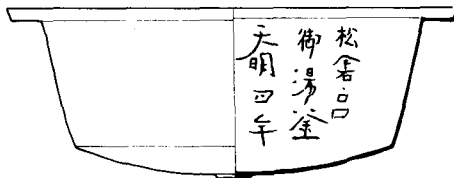
図3 銅形の「釜」(1) 16・17縮尺1/30, 18縮尺1/15, 19~22縮尺1/8



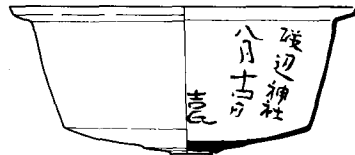
23 石川県七尾市総社蔵



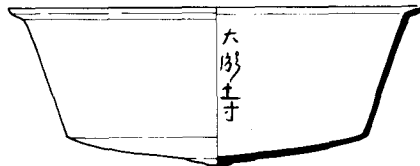
24 石川県能都町木住神社蔵



25 石川県羽咋市四柳神社蔵



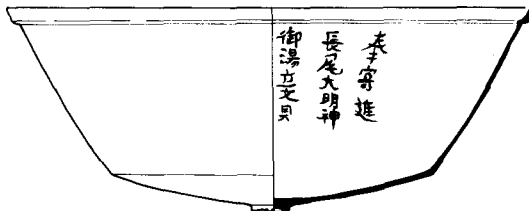
26 富山県氷見市磯部神社蔵



27 福井県今立町大滝神社蔵



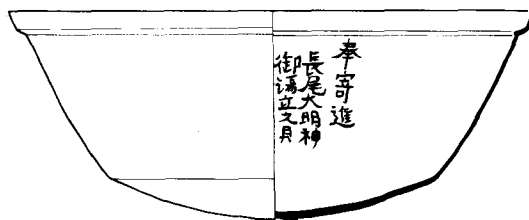
28 福井県今立町大滝神社蔵



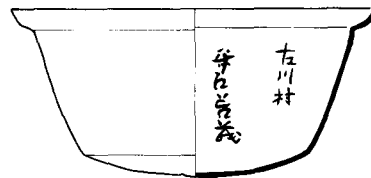
29 広島県加計町長尾神社蔵



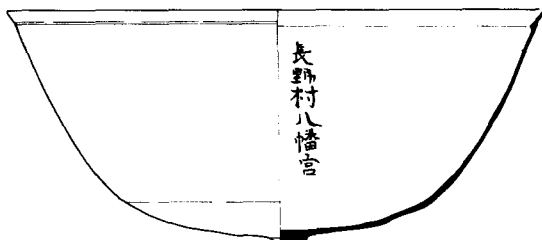
32 鳥取県倉吉市斎江家



30 広島県加計町長尾神社蔵



33 鳥取県倉吉市斎江家



31 山口市大内長野八幡神社蔵



図4 鍋形の「釜」(2) 23~33縮尺1/8

そらく鑄鉄製の鍋Aではなかったかと推定する。そうした意味で大滝神社は、あるいは鍋釜地域と鍋釜地域との境目のような位置にあるのではないかと考えられる。

さらに畿内を越えて、西国諸国の例をあげると、中国山脈の山間部に位置する広島県山県郡加計町の長尾神社湯立て釜(29・30)は、宝暦12年(1762)銘で鍋Aの形態をしている〔加計町役場1961pp.707〕。また、同県神石郡豊松村の鶴岡八幡神社蔵品も、実見していないが、近世のものと推定され、鍋Aの形態をとるものであることが確かである。このほか、享保2年(1717)銘の山口市大内長野八幡神社の湯立て釜(31)も鍋Aの形態をとる。また、鳥取県倉吉市の斎江家で製作したと推定される湯立て釜には、明治41年(1908)銘と天明8年(1788)銘の2口があり(32・33)、これも鍋Aの形態をしている〔倉吉市教育委員会1986p.145〕。四国や九州の実物の調査をおこなっていないが、たとえば徳島県鳴門市大麻比古神社の湯立て釜は鍋A、香川県丸亀市神野神社の湯立て神楽に使用される釜も鍋形である<sup>(5)</sup>。このほか、高知県香美郡物部村では伊弉諾流祈禱という古い伝統をもつ祭りが旧暦正月におこなわれるが、この湯神楽に使われる釜は鍋Aの形態をしている〔高木1979〕。また、九州の大分県宇佐郡院内町の日岳と同県直入郡荻町の荻神社の湯立て神事に用いられる釜は、いずれも鍋Aの形態である〔大分県教委1960pp.209, 211〕。こうした近世以降の湯立て釜も、中世の鍋釜の地域的伝統の一面を継承している可能性があり、日本における中世以降の鍋釜の複雑な歴史的展開に対応するものと考えたい。

鍋形にみられる「釜」という表記は、どう解釈すべきであろうか。これが、後段の課題である。越谷吾山の著した方言辞典『物類称呼』(安永4年(1755)成立)の巻之四器用には、

釜 かま○江戸にて称するかま(羽釜の図)如此を 畿内及西国四国俱にはがまといふ。関西にてははがまの小なるものにて茶を煎じて茶がまといふ。又江戸にて云ちやがま(鑄付茶釜の図)如此を 畿内及び西国にてくわんすと云。東国にてくわんすとよぶものはのはのなき物につるをかけたるをいふ。四国にてあられくわんすとよぶたぐひ也。

鍋 なべ○江戸にてくちなべといふを遠江及上総下総にてせんばと云。四国にては銅にて制たるをせんばといふ。泉州にてとりなべと云。

というような記載がある。こうした細かい器種細分の実態解明は今後の課題であるが、地域的な差違が18世紀中葉に確実にあったことがわかる。上記の鍋形の「釜」は、神事に使うものとして、器形に関係なく「湯釜」あるいは「湯立釜」ように「釜」と記されることになっていたと考えるのか、地域によってその呼称が異なり、『物類称呼』にみるような地方的名称があったと考えるのかは意見のわかれるところであろう。こうした問題をさらに検討するために、次節で視点を変えて考察を進めたいと思う。

## ⑤……………描かれた鍋釜

最後に、近世の図を付した百科事典や、鑄物師の技術書・製品型録などの絵画資料をとりあげて、鍋釜の器名と形態について検討する。羽釜・鍋Aあるいは鍋C・鍋Bの流れをくむと考えられる諸器種が、どう記載されているのか、『訓蒙図彙』以下、近世・近代の絵画資料を図5のようにまとめた。

前述のように、『訓蒙図彙』では、羽釜は「釜」、鍋Aも鍋Bも「鍋」と記されている。これが近世京都の鍋釜に対する基本的な呼び方であろう。また、近江辻村（滋賀県栗太郡栗東町）の『鑄物職執業之図』（明治4年）巻末の鑄物製品の図では、羽釜には「釜 六寸より二尺五寸迄」、鍋Aには「鍋 尺一寸より二尺三寸迄」、鍋Bには「同（鍋） 五寸より二尺迄」と解説があり『訓蒙図彙』と軌を一にする。さらに、大阪市東区の宮崎商店の『鑄物諸品珎瑯諸品正価表』では、羽釜は「羽釜」、鍋Aは「平鍋」、鍋Bは「口鍋」・「大和鍋」と記載されている。このように、中世において先進地域であり、羽釜が相当量流通したと考えられる畿内とその周辺部では、鍋Aは「鍋」と記されていることに注意したい。それでは、それ以外の地域ではどうだろうか。

まず、越中高岡の『銅器の説』は、江戸末期～明治にかけてのものと推定される技術書であるが、その製品例の鍋釜の図解があり、羽釜は「釜」、鍋Aの形態をしたものは「鯉釜」、鍋Bは「鍋」と記載されている〔養田・定塚1988p.376〕。また、埼玉県北足立郡川口町の『鍋屋平五郎商店型録』（明治28年）では、羽釜は「大釜」・「小釜」など、鍋Bは「口附鍋」・「料理鍋」などと書かれている。鍋Aあるいは鍋Cの形態と思われるものは「小平釜」・「塩釜」・「平釜鉢長」などであり、基本的に「釜」という名称でとらえられている。鳥取県久米郡古川村（現倉吉市）の『斎江鑄造場鑄物製品枚帳』では、羽釜は「羽釜」、鍋Bは「地鍋」・「平鍋」・「口附鍋」・「大和鍋」などと記載されている。鍋Aには「平釜」・「西釜」・「東釜」があり、やはり「釜」ととらえている〔倉吉市教委1986〕。長野県上田市の『小島鉄工所営業案内』では、羽釜は「大釜」・「中釜」・「小釜」など、鍋Bは「鍋」や「揚鍋」と記載される。鍋A（鍋C）は「平釜」・「蕎麦釜」・「麻釜」・「寒天釜」など、これまた「釜」としている。最後に、愛知県岡崎市の『服部鑄造株式会社製品案内』（昭和7年）では、羽釜は「大釜」・「中釜」・「小釜」、鍋Bは「料理鍋」・「丸鍋」などがある。鍋Aは「羽反」のほか「平鍋（平釜・ダラ鍋）」としており、鍋Aが「鍋」と「釜」の両様に記載されている。

東海地方の尾張・三河の周辺は、鍋釜地域と鍋地域の境界にあたる地方であるため、「釜」と「鍋」両様の表現がみえるのではないかと考えるが、その他の中世における鍋地域で、鍋Aや鍋Cにつながる推定される器種が「釜」と呼ばれていることは確からしいのである。

石塚尊俊氏によれば、出雲地方の一部には羽釜の普及の遅れた地方があり、そこでは鍋が主たる煮炊形態であった〔石塚1971p.72〕。また、日向佐土原の僧侶野田泉光院の廻国巡礼の旅日記『日本九峰修行日記』（文化9年（1812）～文政元年（1818））によれば、普通なら茶を沸かすには茶釜が使われるのだが、石見国の家々では鍋が使われていたという〔宮本1980p.122〕。これらは、山陰一帯が長らく鍋地域であったことを物語るものといえよう。そして、こうした中世以来の伝統が脈々と持続していることに注目するならば、鍋釜の名称もそうした伝統を長く伝えているのではないかと推定できる。

絵画資料に示されたものは、近世から近代にかけての呼称ではあるが、儀式用「釜」とどまらず、一般の用途に供された鍋Aや鍋Cも「釜」とされていたことは、この伝統がさかのぼって中世にあり、畿内を中心とする地域より外側の地域のなかには、鍋Aや鍋Cが「釜」と呼ばれていた可能性を示すものではないかと考える。そうすると、地方文書にあらわれる「釜」は、羽釜とはかぎらず、その地の伝統的な鍋釜の諸器種を勘案して検討しなければ、確定できないこともあるのでは



図5 描かれた銅釜



なかろうか。以上のように、鍋釜といった煮炊形態においても、地域性というものの根強さを感じざるをえない。畿内とその外側の地方の差はもちろん、網野善彦氏のいわれる東と西の社会のちがい〔網野1982〕などが大きくからまって、煮炊形態の伝統性を形成したとみられるのである。

## ⑥……………おわりに

国立歴史民俗博物館共同研究「中世食文化の基礎的研究」において、1991年12月20～21日に、鎌倉中世都市遺跡見学会がおこなわれ、筆者もこれに参加させていただいたが、その際に鎌倉市庁舎講堂において鍋釜に関する発表をおこなった。本稿は、その時の原稿をもとに、大幅な加筆訂正を加えて作成したものであるが、鍋釜の器名の変遷や地方差を古辞書、鋳物製品や絵画などのごくかぎられた資料からかいまみたものにすぎない。さらに文学作品や文献史料の鍋釜関係記事を広く収集したうえで細部を検討し再論したいと考える。関係資料をご存じの方には、御教示をたまわりたいと思う。

また、本稿作成にあたっては、以下の方々の御協力を得た。まず、鋳物資料の所在に関しては、風呂研究家の佐藤富美房氏の御教示を深くいただいた。鋳物師の製品型録資料については、川口市教育委員会の高橋寛司氏、早稲田大学商学部の宮下史明先生に御紹介をいただいた。また、牧方市文化財研究調査会の吉田晶子氏、栗東歴史民俗博物館の井上優氏、倉吉博物館の藪中洋志氏には、鋳物関係資料収集の過程で特にお世話になった。個々の鋳鉄鋳物資料の調査にあたっては、所蔵にかかる方々をはじめ、所在地の教育委員会の関係各位の御助力を得た。また、挿図の製図にあたり、磯谷敦子さんの御協力を得たほか、京都大学総合人間学部の西山良平氏に御教示をいただいた。末筆ながら、お世話になった多数の方々に深甚の謝意を表する次第である。

(京都大学埋蔵文化財研究センター、国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

## 註

(1)——1995年8月、名古屋市見晴台考古資料館において、水橋公恵氏に御教示をいただいた。

(2)——神奈川県箱根町箱根神社羽釜(図2-11・12)、山口県三隅町三隅八幡神社蔵羽釜。

(3)——本節執筆にあたっては、日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』1～20(小学館 1972～1976年)、古事類苑刊行会『古事類苑』第53巻(1932年)器用部5飲食具5を大いに活用した。また、平安時代から室町時代にわたる古辞書に関しては、西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』(世界思想社 1995年)に教えられ、それぞれの古辞書については、以下の刊本を参照した。

京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本新撰字鏡』(臨川書店)1967年

京都大学文学部国語学国文学研究室編『和名類聚抄』(臨川書店)1968年

山田孝雄校訂『伊呂波字類抄』(風間書房)1960年

正宗敦夫編『類聚名義抄』(風間書房)1962年

川瀬一馬校訂『字鏡集』(雄松堂書店)1977年

北野克・田山方南編『名語記』(勉誠社)1983年

奥村三雄『聚分韻略の研究』(風間書房)1973年

中田祝夫・林義雄編『古本下学集七種研究並びに総合索引』(風間書房)1971年

中田祝夫・根上剛士編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』(風間書房)1971年

川瀬一馬校訂『和玉篇』(雄松堂書店)1976年

中田祝夫・山田忠雄編『文明本節用集研究並びに索引』(風間書房)1970年

中田祝夫編『古本節用集六種研究並びに総合索引』(風間書房)1968年

土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店)1980年

森田武編『邦訳日葡辞書索引』(岩波書店)1989年

(4)——岩崎佳枝・網野善彦・高橋喜一・塩村耕校注  
『七十一番職人歌合・新撰狂歌集・古今夷曲集』(新日本  
古典文学大系61)(岩波書店)1993年  
(5)——広島県神石郡豊松村の鶴岡八幡神社、徳島県鳴  
門市大麻比古神社、香川県丸亀市神野神社の湯立て釜に  
ついては、各々の神社の宮司の皆様方の御教示を得た。  
なお、神野神社の湯立て神楽は国立民族学博物館ビデオ  
テープ1279番に収録されている。

[挿図文献]

- 4 長井数秋『伊予国真導廃寺発掘調査報告書』1977  
p.20
- 5 福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏  
遺跡XV』1984 p.10, 第15図
- 6 島根県教育委員会『富田川河床遺跡発掘調査報告書  
Ⅲ』1983 p.70
- 8 浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ⅶ』1984 pp.83-4  
1～3・7・9～33筆者実測

## 参考文献

- 朝岡康二 1993年 『銅釜』(ものと人間の文化史72 法政大学出版局)  
朝岡康二・石野律子 1982年 『暮らしの中の鉄と鋳物』(ぎょうせい)  
網野善彦 1980年 『日本中世の民衆像—平民と職人—』(岩波新書黄版136)  
1982年 『東と西の語る日本の歴史』(そしえて文庫7)  
1984年 『日本中世の非農業民と天皇』(岩波書店)  
安念幹倫 1995年 『富山県射水郡大島町北高木遺跡の鑄造遺構について』『鑄造遺跡研究会 資料5』  
石川県埋蔵文化財保存協会 1993年 『小松市林遺跡』  
石塚尊俊 1971年 『出雲隠岐の民具』(考古民俗叢書9 慶友社)  
五十川伸矢 1990年 『中世前半の鑄鉄鋳物』『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』  
1992年 『古代・中世の鑄鉄鋳物』『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集  
今立町誌編さん委員会 1981年 『今立町誌』第3巻 写真・図録編  
江谷 寛 1976年 『湯屋の石風呂と鉄釜』『物質文化』26  
大分県教育委員会 1960年 『大分県の文化財』  
大阪府教育委員会 1988年 『日置荘遺跡(その1)』  
加計町役場 1961年 『加計町史』上巻  
香取秀真 1943年 『鍋のいろいろ』『続金工史談』  
倉吉市教育委員会 1986年 『倉吉の鋳物師』  
小林 剛 1971年 『俊乗坊重源の研究』(有隣堂)  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994年 『坂戸市金井遺跡B区』(『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第146集)  
佐藤喜代治 1971年 『漢字と国語』『国語語彙の歴史的な研究』(明治書院)  
鈴木友也 1973年 『茶湯釜』(日本の美術No89 至文堂)  
高木啓夫 1979年 『いざなぎ流御祈禱』  
富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 1994年 『埋蔵文化財年報5』  
長岡京市教育委員会 1990年 『長岡京市文化財調査報告書』第24冊  
名古屋大学文学部国史研究室 1982年 『中世鋳物師史料』(法政大学出版局)  
宮本常一 1980年 『野田泉光院』(旅人たちの歴史1 未来社)  
養田実・定塚武敏 1988年 『高岡銅器史』(桂書房)

---

## Medieval Japanese Pots and Kettles: Temporal and Spatial Variations in their Names

ISOGAWA, Shin'ya

The author examines the temporal change and spatial variations in the terms meaning pots and kettles in medieval Japan. To achieve the goal, old dictionaries, inscriptions on some cast-iron cooking vessels, as well as drawings were consulted. The old Japanese dictionaries only contained the vocabularies used in the Kinki District that was the political and cultural center of Japan in the late medieval period. During a time period between the middle twelfth and the beginning of the thirteenth centuries, the Chinese characters 鍋 and 釜, which means pot and kettle respectively, were pronounced as “*kanabe*,” which now means a tripod cauldron. A unclear distinction between these two terms in the twelfth and thirteenth centuries is also evident in inscriptions on some cast iron vessels. Nearly all brimmed pots were referred to as “kettle 釜,” and some pots without brim that should be considered as a “pot” by the present-day terminology, were also labelled as “kettle.” At the end of the thirteenth century, the character 釜 meaning a brimmed pot, the one 鍋 meaning a pot without brim, and the one 鼎 came to be pronounced as *kama*, *nabe*, and *kanabe*, respectively, thereby these three were all distinguished.

In the fifteenth century, *tsurunabe* 弦鍋 [pot with two “ears” as handles] appeared in addition to the three mentioned above, and the *tsurunabe* became widely used. Moreover, the vessel forms that had not been historically well known, such as *kuwansu* 罐子, *seiban* 煎盤, and *yakan* 薬罐, became apparent. These various kinds of pots in the fifteenth century became prototypes of cooking vessels of later time periods, while the term *kanabe* came to mean a non-practical treasure or old-fashioned vessel.

Outside the Kinki District brimmed pots were not widely used in the medieval period. Therefore, the character 釜 that should ordinarily mean kettle remained locally to mean pots without brim. This is evident in illustrations of encyclopedias and catalogs in early modern period (after sixteenth century).